

2017年5月31日 (隔月・年6回発行)

編集・発行

〒413-0715

下田市宇土金351番地

上原仏教美術館

TEL <0558>28-1216

URL <http://www.uehara-buddhismart.jp>

E-mail: gakugei@i-younet.ne.jp

美術館だより



仏教美術館だよりをふりかえて

これまで発行してきた上原仏教美術館の美術館だよりは今号で最終号となります。各年度の第一号の表紙で振り返ってみました。(詳細は5ページ)

調査報告 江戸時代の仏像 ～南伊豆町仏像悉皆調査から～

昭和58年開館以来、上原仏教美術館は伊豆の仏像調査を継続して行ってきました。調査ではしばらくの間、鎌倉時代以前の仏像のみを調査対象としていましたが、平成14年夏以降、対象を江戸時代の像まで拡大して調査を行っています。古代・中世の仏像に比べ造形力に乏しいと、評価が芳しくない江戸の仏像ですが、江戸時代は、民衆が仏像造像を発願、仏師以外の様々な人たちまでもが自らの手で仏像を造った時代。この時代には素朴で親しみ易く、魅力的な仏像が沢山あります。今回は、当館が行った南伊豆町の仏像悉皆調査の中で見出された701体の仏像の中から、魅力的な江戸の仏像を選んでご紹介いたします。

①②は伊豆南端に近い小さな港町、中木地区の薬師堂に伝えられた仏像です。薬師堂は港から少し登った平坦地に、崖に貼りつくように建っていますが、参道には本尊の薬師如来に奉納された石塔が林立し、往時の信仰を偲ぶことができます。この薬師堂の本尊が①の薬師如来立像。像高30cm。両手両足先以外を一材から彫りだした素朴なお像で、何故か別に造った肉髻が、帽子のように頭上にちょこんと載る様がユーモラスです。一方の②の菩薩立像は観音像でしょうか。像高20.1cm。台座を含む全てを一材から造るお像で、素朴ながら、細身の造形に本尊とはまた違った作風を見せる像です。

仏像の形を抽象化したような仏像も江戸時代には散見されます。③の観音菩薩立像、④の地藏菩薩立像などがその例。「写実を離れ、形式化」と言う評価は、一般的にはあまり良い評価ではないでしょうが、仏の体や面貌をざっくりとしたおおまかな形でとらえ、衣文をここまで省略して表現すると、現代の抽象芸術に通じるような面白さがあります。この方向の延



①薬師如来立像（中木薬師堂）



②菩薩立像（中木薬師堂）



③観音菩薩立像（二條薬師堂）



④地藏菩薩立像（良泉寺）

長線上にあるのが⑤の誕生仏たんじやうぶつです。像高17.2c m。このお像を見出した時は、手にしている木片がまさか仏像だとは気付かず、小ぶりの拍子木の片方かと思いました。樫かしと思われる極めて堅い材から彫り出した像で、造像の心得がないこのお堂の住僧が、切れない刃物で材に立ち向かい、その堅さに大いに手こずりながら、ようやくここまで造ったという感じがします。この像の姿は作者が意図したものではないでしょうが、巧まずして微笑ほほえましく、魅力的な仏像だと思います。誕生仏は4月8日の花祭り（灌仏会）かんぶつごで甘茶あまぢやをかけるお像ですので、通常は水分で傷まぬように銅でつくるところを、木像であるのも面白いと思います。

⑥は不動明王立像ふどうみやうりゅうじやう。像高57.9c mの比較的大きなお像で、右腕と頭頂部以外を一材ちゆうしやうぶで彫出する仏像。目には玉眼ぎよくがんならぬ銅板を取り付けています。素朴な造形ながら太くがっしりとした両脚たたくまは逞しく、口にはギザギザと歯を彫出した、迫力のある仏像です。本像は台座の墨書から元文二年（1737）につくられたことが分かります。

⑦は南伊豆町の最南端、石廊崎地区いろうざきの正眼寺にある稲荷堂の本尊で、このお堂は古く般若堂と呼ばれていたそうです。白狐びやくこに乗る女神像ですが、女神の姿は丸々と福々しく、またその表情は実に楽しげです。女神を乗せた白狐が少し開口して上を向く顔も楽しげで、後ろ足を反りあげるさまがなんとも愛らしくユーモラスです。

これらのお像の多くは専門仏師の作とは思えず、修験者や修行僧が信仰のために刻んだものでしょう。その姿は確かに稚拙かもしれませんが、ユーモラスで暖かみがあり、時に斬新ですらある個性的な魅力を持っています。生まれ変わる美術館では、古代・中世に遡る優れた伊豆の仏像を展示するのはもちろん、機会があれば今回採り上げたような魅力的な江戸時代のお像もご紹介できればと思っています。 (田島)

※ここでご紹介した仏像は、いずれも通常は非公開です。



⑤誕生仏



⑥不動明王立像（青龍寺）



⑦茶枳尼天像（正眼寺）

本連載では仏教と温泉の関係を紹介してきました。その中でも、伊豆半島の事例を中心に上げてきましたが、最後に伊豆半島の自然環境の特長を中心にまとめてみたいと思います。

伊豆半島で温泉が豊富な理由は、伊豆半島が誕生した時まで遡ります。伊豆半島は今から2,000~1,000万年前に活動を開始した海底火山が長い年月の中で隆起し、200~100万年前に陸地になり、その陸地が60万年前に本州と繋がって、現在の伊豆半島の原型が完成したと考えられています。海底火山から誕生した伊豆半島がその地熱により、各地で豊かな温泉を湧出させているのは本連載で度々述べてきたとおりです。

本州への衝突や火山活動により、天城山脈をはじめとする伊豆半島の険しい山岳地帯や、浄蓮の滝などの名勝が生まれました。平野の少ない生活環境は、一方で俗世から離れた信仰世界を形成していきました。厳しくも幻想的な伊豆半島の自然環境は山岳信仰の舞台を用意しました。

伊豆半島における山岳信仰の世界では、実態は未だに解らない部分も多いのですが、伊豆山神社がその中心的な役割を担っていた時代があるようです。伊豆山神社は走湯山の名前が物語るように、温泉にまつわる神様をまつる神社です。かつて伊豆山神社には仏教寺院も存在し、伊豆の修験道を総轄していた存在だったようです。

このような険しい山々は人々の生活空間

を断絶する存在でもありました。そのため、古来の伊豆半島では入り江や浜辺ごとに港町が形成され、海上交通が発達していたようです。伊豆半島の仏教美術の特長として、山岳寺院の他にも海岸近辺に古仏が伝来しているといった特徴が見られます。

陸路において外部との交流が困難な環境は罪人を地方に追放する遠流の地にも利用されました。そのため、伊豆には都から流刑を受けた罪人が流されてきました。そのような人々は罪人であるのと同時に、都から様々な文化をもたらし存在でもありました。その中でも有名なのが源頼朝ではないでしょうか。頼朝が現在の伊豆の国市周辺を本拠地に使っていた北条氏と旗揚げし、鎌倉幕府を開いたのは広く知られていることです。

伊豆の険しい山岳は神仏の世界観を育み、人々により開かれた土地には文化が隆盛していきました。現代においても風光明媚な温泉地である伊豆ですが、豊かな自然の恩恵を受けつつも、時には自然の猛威にさらされながら、歩んできた歴史が詰まっています。

今秋、リニューアルオープンを迎える上原仏教美術館ですが、美術館までの道中は伊豆の自然環境を楽しみつつ、温泉でゆったりとくつろぎながら、美術館にご来館いただければと思います。(森田)

〈参考文献〉

・小山真人『伊豆の大地の物語』(静岡新聞社、2010)。

白浜小学校出張授業

2017年5月8日(月)に下田市立白浜小学校を訪問し、6年生・13名に対して修学旅行の事前学習として、仏像の見方と、鎌倉での見学先候補地について話をしてきました。鎌倉では鶴岡八幡宮、鎌倉大仏などメジャーな見学地をはじめ、北鎌倉のお寺などを紹介。授業の合間にはクラスの全員から元気よく質問が飛び交い、気が付けば予定時刻を過ぎてしまいました。授業の終わりには生徒の皆さんから歌のプレゼントをいただきました。白浜小学校6年生の皆さん、素敵な思い出を作ってください。上原仏教美術館ではリニューアルオープン後も奈良・京都の修学旅行の事前学習など

に対応した、出張授業を引き続き受け付けております。(森田)



配付資料

美術館だよりを振りかえって

今号で最終号となる上原仏教美術館の美術館だより。美術館の広報誌として、現在の形式では1985年から年6回、32年間発行をしてきました。執筆や編集はその時々々の学芸員が交代をしながら担当し、美術館の企画展や講演会のほかに、伊豆半島をフィールドに行っている調査の成果を発表する紙面構成をとってきました。

50号頃までは美術館が下田の地に誕生し、伊豆半島内の仏像調査を開始した時期。調査を行った古い仏像を紹介する地元の文化財シリーズを掲載し、伊豆には古い仏像がたくさんあることをお伝えしてきました。

50号以降は美術館の舞台裏を紹介。展示

会を開催するまでのさまざまな事柄や、ふだん見ることがない、学芸員が行う仕事の紹介記事もありました。

100号を過ぎてから、伊豆半島の調査で得られた仏教美術に関する紹介を行い、仏像だけでなく、仏画や石造物、歴史の情報も皆様にお届けしてきました。また印刷も当初はモノクロでしたが、133号からカラー印刷となりました。

たくさんの方に美術館の活動をお知らせし、時には内容に対しての感想も頂戴してきた美術館だより。これからも伊豆と美術館の魅力をたくさんお伝えしていきたいと思っております。新しくなる美術館だよりも引き続きよろしくお願いたします。(桜井)

11月オープンを目指して

館日より185号より工事の様子をお伝えしてきた工事日誌も今回で最終です。

いよいよ工事也大詰めを迎えました。外壁にタイルが貼られ、外観の意匠も整いはじめると、今まで図面で確認してきたものが建ち上がってきたという実感が湧いてきます。

現在は内装工事も本格化し、美術館の顔になる入口受付周り、仏像がたくさん立ち並んでいた既存の展示空間も様変わりしています。既存の部分は今まで少し暗かったのですが、壁紙を変えて明るい印象の建物になります。新しい建物工事の終了後、たくさんの方々に考えていただき、素晴らしい

光空間を実現することになる展示ケースが納入されると、美術館はひとまず完成となります。その後、良い展示環境にするための空気環境のチェック、そして皆様をお迎えするための展示準備を行います。

11月3日、装いも新たに生まれ変わる美術館へ是非お越し下さい。(桜井)



編集だより

今後は『上原近代美術館だより』と合併した新しい美術館だよりをお届けすることになりました。今後も美術館の最新情報をお知らせしていきますので、よろしくお願い致します。

(学芸員 森田龍磨)

今号で最終号。今までお読み下さりありがとうございました。編集作業は苦しくもあり、楽しくもありました。

(学芸員 桜井和香子)

上原仏教美術館の「美術館だより」は本号193号をもって最終号となります。今後、紙面・構成を一新したお便りをお届けできればと思います。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

(主任学芸員 田島 整)

美術館だよりが 新しくなります

開館以来、上原仏教美術館の活動を皆様へお伝えして参りました「美術館だより」は、今号をもちまして、現在の形式での発行は終了となります。

今後は紙面とサイズを刷新して発行します。生まれ変わる美術館だよりにどうぞご期待下さい！

お知らせ

仏教美術館は
2017年11月3日(祝)オープン
を予定しております。

最新情報は上原仏教美術館ホームページにて公開しています。

●上原仏教美術館●

<http://www.uehara-buddhismart.jp/>